

# 保育者が生命的になるように

津守 真



共犯者になる

先日、四年生のS君が地下の教材室に私をつれてゆき、黒い版画用インキをローラーにつけ、ドアを閉じ、電灯を消し、真暗闇の中で私を部屋の隅に座らせた。しばらくの時間をこらして動かない。やがてくすくす笑って私の膝に座った。暗闇の中で黒インキを手にして、黒づくめで。何だかおかしくなって一緒に笑った。

S君はいつも流しに洗剤を流したり、ワインあけで厚い木の板やプラスチックや思いがけないものに穴をあけたり、次から次へとよく思いつく感心するくらい大人の意表をつい

たことをやっけてのける。大人が普段の環境を保とうと思ったら困らされることが多いので、こちらも一緒になってやってみる覚悟がいるのである。

この日、一日の保育が終わってから、職員たちと教材室の暗闇の中のことを話した。何かの人たちが経験をもっていた。これをどう考えたらいいのだろうかと私が問うと、よくこの子とつき合うひとりの職員（\*）が、それは共犯者になった感じだと言った。人目を避けて、二人きりで、秘密にわくわくすることをやろうよというみたいだという。とたんに私も少年の頃のことを思い出した。大人の目の届かないところで、友だちと、大人からは叱られそうなことをする、スリルのある面白さはいまでも忘れ難い。S君の暗闇の中のことはあの時の感覚に近いのではないかと思った。

私は日頃子どもの能動性を尊重したいと思っている。この子といるときにもこの子が思うようにやらせてあげようと思っている。しかし共犯者にはなっていない。どんなにやらせてやっても、よき管理者、よき校長としてやらせてあげているのである。だからあたりが汚れないように始終拭いたり片付けるのに一生懸命である。この子は部屋を暗くして管理者に怒られそうなことを二人でやろうよと言っているのに、私は、どうして電灯を消すの？ 何で黒インキなの？ と思ひ、それも必要ならやらせてあげようという具合である。それを何とか自分の加担者にひきこもうとしてこの子は大声をあげる。大目に見てもらってやるのではなくて、校長先生をも共犯者にして、一緒にやろうという誘いであるこ

\*榎沢良彦

とに私は気付かされた。

子どもたちは学校にくるとき、今日はこんなことをやってやろうと意気込んでくる。

二歳になる私の孫も、私の家にくるときには、ひきだしから写真を引っ張り出し、思い切り水を飛ばして遊ぼうと意気込んでくる。

その意気込みが子どもを人生と世界に対して前向きにさせる。その生命性がなかったら、内容として価値ある活動が用意されても、最も大切なものを欠くことになる。

## 老年と生命性

子どもの生命性に対して臆せずにとたえるのは若い人である。若さはそれだけで子どもにとって魅力である。老年期にある私は、子どものエネルギーにとたえるのに若い人とは違った仕方があるのではないかと考える。

そんなことを考えていたとき、ひとりの五歳の男の子が、庭の固定遊具に張り渡した綱にぶら下がったり、横になったり、身体を縦横に動かして飽きることなく遊んでいるところに出会った。若い職員と一緒に固定遊具に上がって動いている。私は一緒に遊ぼうと思っても到底同じようには動けない。また同じように身体を動かそうという気も起こらない。それだけ私はこの子の世界からかけはなれているのである。ことばをもたないこの子は、身体の姿勢の変化につきることのない感覚の変化の喜びを感じているらしい。この子

の楽しみは私の楽しみとは違ふところにある。そのことを前提にしないと、子どものすることに価値を認めてつき合うことができなくなってしまふ。

それから三日後に、朝この子と出会ったとき、この子はすぐに私の背中にとびついた。この前のとき私が傍にいたことが私に対する親しみを起こさせたのだろう。私におんぶしてトランポリンを跳べという。私にはとても若い人のようににはできないが、一緒にやるよという意気込みにこたえて私なりにひと遊びすることはできるだろう。トランポリンの上で一緒に横になったり、ひっくり返して子どもの姿勢をいろいろに変えたりすると、子どもが私に合わせて面白さをつくり出してくれる。そのうちにこの子は衣服を脱ぎすて自分でトランポリンをとびつづけた。

いろいろな大人たちをみていても、今日子どもと一緒に何かをやらうという意気込みが、子どもの生活を生きたものにするように思う。大人は、性別、年齢、体力の相違などにより、それぞれに限界がある。子どもに対応する仕方は違ふ。そして、どの人にもそれに応じた自分自身の生命的な部分があるのだと思う。それを失わないようにするにはどうすればよいか。そこに保育者の毎日の課題がある。

(愛育養護学校)